

## 文理の垣根を越える ―会長基調講演（2022 春例会）を拝聴して

### Beyond the Boundaries of Humanities and Sciences

— An Impression after Listening to the Keynote Speech

by Pres. Kuniyoshi Munakata at the ISHCC Spring Conference 2022

菊地 善太

KIKUCHI Zenta

これは、2022年3月の国際融合文化学会春例会にて、宗片邦義会長の基調講演を拝聴した時の感想です。以下、宗片先生にメールしたものを書き出しました。

先の例会で宗片先生のお話を拝聴し、何というか「ベルリンの壁の崩壊」を聞いた時のような、驚きと感動を覚えました。先生の内にあった「物理学」という壁が、「量子」という見えないものを視る学問でもあると知って消滅したように思えました。先生が物理学と文学の垣根を取り払って融合と相互啓発にまい進されるのを感じて、私も、そういう方向で考えを一新していきたいと思いました。

私にとって物理学は、「理（ことわり）」の学問であり、物事概念を考える学問です。森羅万象の事象に概念と理屈を与えるものです。それは森羅万象の事象に「言葉」と意味を与える人文科学の学問に通じます。「光」という言葉（と概念）がなければ、人は「光」に気づけません。世の中に「青」と「赤」しか色の言葉が無かったら、人は「黄色」に気づけません。物理学もまた同様の世界。ニュートンが発見したとされる「重力」も、それを知らず意識しなければ、リンゴの落下はただ下に落ちるだけの現象です。「重力」は目に見えるのでしょうか？想像もつかない概念論理世界を創造した物理学の先人は、想像もつかない概念世界や創作世界を創造した哲学者や文学者に負けず劣らずの存在と思います。

私の中にはいまだに「壁」があります。概念として捉えられるものと捉えられないものです。前者は物理学に代表されるようなもので、後者は文学や芸術の一部です。文学や芸術でも、測定や分析に終始するような学問分野は違います。お能を観た時の心が震えるような感動は言葉になりません。説明できません。「霊魂」などは未だにわかりませんが、時々壁の向こうが少し見えた気になります。

私は大学で物理学を専攻し、その後も企業で研究開発の仕事に就いていました。しかし、科学技術の発展が必ずしも社会を豊かにしないこと、人間を幸せにするとはいえないことに気づきました。それをもたらすのは、理学や工学ではなく、むしろ文学や芸術ではなからうか？そ

う思って、今世紀の初め、宗片先生のゼミの門を叩きました。心に喜怒哀楽を与え、感動を与えるものがありました。宗片先生が追い求める、文理の垣根を越えた世界、学問的共生の世界を、今後とも私も追いかけていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。